



青葉 9月

探究の楽しさ

校長 藤原 明美

先週、蝉が一生懸命に鳴いていました。季節を先取りするその声は、もうすぐ夏が終わることを知っているかのようです。夏休み明けを前に涼しくなり、秋を感じます。この夏は猛暑が続いたり突然の大雨に見舞われたりと、心配な天気でしたが、行動制限のない久しぶりの夏休みを子どもたちはどのように過ごしたのでしょうか。

私はこの夏、様々な生き物の命と向き合いました。教師ですから、メダカが透明の小さな卵を水草に産み付け、その稚魚が生まれてくる様子などについて、様々な基礎知識はありました。しかし夏休みという長い時間の中で、じっくりと2匹のメダカの命と向き合い、ワクワクする気持ちで朝を迎え、探究し続けた日々は、私の生き方にたくさんの示唆を与えてくれたかけがえのない時間になりました。



知識の獲得にとどまらず、のめり込んで調べ考えたこの時間は正に「探究」でした。家にはメダカを2匹だけで飼っている水槽があり、私の探究の舞台でした。ある朝、雌が抱卵していました。

2匹のメダカから卵がどのようにして生まれ、どう育っていくのか、雌は何時ごろ何個ぐらい産むのか、何日おき？・・・と、次から次へと疑問がわいてきます。思考の連続です。水温や日照時間

(室内の場合、ライトの照射時間)が関係し、個体差もあるでしょうが、その雌のメダカは明け方4時頃に卵を産み腹に抱えること(抱卵)が多かったです。その後産み付ける水草を探して泳ぎ、昼頃まで卵が腹に付いている場合、水草の葉脈に逆らって決死の覚悟で水草に突入し体を捻らせ必死で産み付けました。その姿に初めて遭遇し感動しました。

ここに今回、私が得た知識を細々と書くことは控えます。現在は「知識」に辿り着くのはそれ程難しいことではないからです。インターネットで検索したら様々な知識は容易に得られますが、悩みながら実践する中で必要に迫られて得た知識が「生きて働く知」になるのだと実感しました。また透明で小さい卵があんなに硬いことに驚き、命の力強さを感じたのは、触らないと実感しにくいです。本気で考え悩むと人に意見を聞きたくなりますし、感動すると伝えたいくなります。これが対話的な学びです。同意見に接すると自分の考えの後押しになりますし、違う意見は自分の思考を深めさせ変容をもたらします。

想像のつかない未知の未来に向かって生きていく子どもたちに身に付けたい力として、今の学習指導要領には「学びに向かう力、人間性等」という言葉が掲げられています。社会や自然と向き合う際、自らの学びを進めながらも、この命を自分は責任をもって飼うことができるのか、自然を壊すことに繋がらないか等々、自分本位の生き方ではなく様々な角度から自分を見つめ直すような価値ある探究の経験が、これからの子どもたちの人生を豊かなものにしていくと思います。



青葉台小学校では、これから運動会を中心に様々な教育活動を行ってまいります。社会状況を鑑みながら、子どもたちの主体的な探究につながるよう、体験的活動を進めてまいります。ご支援ご協力をどうぞよろしく願いいたします。